

日本ブランド発信事業 「蒔絵文化と未来への継承」

平成 28 年 4 月
「日本ブランド発信事業」専門家
京都産業大学教授・蒔絵師
下出 祐太郎

【事業趣旨】

今から 470 年余り前、日本は戦国時代。ヨーロッパは大航海時代を迎えていました。ポルトガルから種子島に鉄砲の伝来があり、スペインから宣教師のフランシスコ・ザビエルたちがやって来ました。宣教師たちは、極東の地の果ての日本の文化にたいそう驚き、本国に日本のさまざまな文物を伝えました。中でもヨーロッパの王侯貴族を魅了したのが蒔絵漆器でした。やがて東インド会社の交易につながり小文字の japan が蒔絵漆器を指すようになり、マリーアントワネットのコレクションにつながっていきました。東西交流の輸出の先鞭を着けたのが、蒔絵漆器だったのです。さらに当時のヨーロッパの国々の国交の進物品としても重要な役割を果たしてきました。

漆の植生は東アジアにしかありませんでした。漆のあるそれぞれの国には、さまざまな漆工芸がありますが、蒔絵は日本独自に発達してきた漆芸技法です。漆という樹液と金という金属を粉末にすることによって融合させ、全く違った価値を生み出した日本人の知恵。最古のものは正倉院の宝物にありますが、京都を中心に 1200 年間培われ継承されてきました。

現在、日本は世界的には工業大国として有名ですが、470 年前にヨーロッパの人々を驚かせた蒔絵の技術、天然素材を用いた手仕事と自然観に根ざした美意識が、今も大切に継承されているのです。

その大切な伝統文化の担い手として、歴史的な縁(ゆかり)のあるイタリア、スペイン、ポルトガル 3 か国に於いて、講演と蒔絵のデモンストレーションを行いました。また、美術館・博物館の視察及び学芸員※の方々との意見交換を行いました。

以下に、事業の内容を記します。

※美術館・博物館関係者の名刺肩書きのさまざまな表記を、便宜上学芸員としました。



南蛮屏風（国立古美術博物館、ポルトガル） 南蛮屏風（オリエント博物館、ポルトガル）

【事業日程】

2016年2月23日～3月7日

【事業内容】

<イタリア>

●2月23日（火）

日本発フィレンツェに夜間に到着。

●2月24日（水）

午前、市内散策の後、講演会場のサンタマリア・ノベッラ薬局本店を見学し、いよいよ公式日程の国立フィレンツェ修復研究所を視察。ルネッサンス文化を支えたメディチ家が残した聖堂や修道院の壁面装飾に施された貴石モザイク（絵画）の修理修復を拝見し、貴石の切り取りを体験させていただきました。貴石モザイク（絵画）の緻密さに驚き、文化財に対する考え方と当時の技術の保存の仕方、それに基づいた徹底した技術指導ならびに保存修理に触れました。また、彫刻の保存修理ほか予定外のさまざまな修理を拝見し、修理概念について意見交換をするに至りました。続いて膨大な所蔵展示品を拝見し、たいそう時間がおしてしまいました。

共催者のフィレンツェ老舗協会会長でありサンタマリア・ノベッラ薬局社長であるアルファンデリー氏や山内弘志総括公使らとの会食、意見交換。

午後8時からサンタマリア・ノベッラ薬局本店での講演会及びデモンストレーションを開催。トスカーナ州議会議長エウジェニオ・ジャーニ氏の挨拶に始まる公式行事に身の引き締まる思いでした。立ち見の方が出るほどお集まりいただき、熱心に聴講いただきました。質疑応答も活発で、ワインなどもご用意いただき、終えて撤収したのは、午前0時近くでした。



講演会およびデモンストレーション（サンタマリア・ノベッラ薬局本店）

●2月25日（木）

午前、ユーロスターでフィレンツェからローマへ移動。

午後 4 時、ジュセッペ・トゥッチ東洋美術館へ。海外の美術館で自分の講演会ポスターが掲示してあり、少し感動。新聞社 2 社から取材を受けました。

講演会並びにデモンストレーションは、ラツィオ州博物館監督局長エディット・ガブリエッリ氏、梅本和義大使、ポリケッティ館長の挨拶からスタート。デモンストレーションは手元を動画撮影で直ちにスクリーンに映し出されました。満席状況でしたがスクリーン映像でご覧いただけました。質疑応答も専門的な質問が多く熱気に満ちました。私の来訪に合わせ、おそらく明治期のものと思われる大型六曲蒔絵屏風の展示をしていただいています。明治期、万国博覧会を通じて再び高評価を得た蒔絵漆器は、数多く輸出された経緯があります。巨大といってもよいほどの作品でしたが、緻密な仕事は、日本でもなかなかお目にかからない秀逸なものであって舌を巻いたのです。修理や手入れについてのアドバイスを熱心に求められました。

終了後 1 時間遅れで大使公邸での会食。梅本大使ご夫妻の暖かいおもてなしを受けました。雨がしっとり降っていました。ホテル着は、午前 0 時近くでした。



講演会およびデモンストレーション（ジュセッペ・トゥッチ東洋美術館）

<スペイン>

●2月26日（金）

午前 5 時 15 分ホテル出発、空路ローマからスペイン、マドリッドへ。マドリッドから再び空路で北東部ナバーラ州の州都パンプローナへ。ホテルへチェックイン後、直ちにナバーラ美術館へ。外務省というところは何と人使いの荒いところだと、この時は正直そう思いました。石畳を歩いてナバーラ美術館を見つけたとき、その壁面の垂れ幕に日本語の「南蛮」という大文字が誇らしく掲げられていて、思わずジーンとしました。ナバーラ美術館で開催されている「南蛮漆器、ナバーラにおける日本の輝き」展の最終日ということでした。私の講演会がその閉幕式に合わせたものでした。どうしてもこの展覧会に合わせたい配慮により組まれた強行日程だったのです。

ナバーラ美術館館長の歓待をうけ、「南蛮漆器、ナバーラにおける日本の輝き」展を視察すると同時に、テレビ取材を受けました。続いて、館内を見学。パンプローナの歴史をゆっくり拝見しました。



美術館視察、講演会およびデモンストレーション（ナバーラ美術館）

午後 6 時から講演会並びにデモンストレーションを行いました。館長が司会進行をしてくださり、聴講の方々の中に美術関係者や修復士も何人もいらっしゃって質疑応答はかなりの長時間に及びました。終演のあとも展示作品についてのコメントを求められました。ホテルに戻って、日付が変わっての夕食をとったのでした。

●2月27日（土）

午前、雨の中をパンプローナ大聖堂、パンプローナ記念闘牛場などを見学しました。昼頃、雨が雪に変わった。雪の中、空路パンプローナからマドリッドへ。

●2月28日（日）

休息日。プラド美術館、ソフィア王妃芸術センターなどを見学しました。

●2月29日（月）

午前、国立装飾美術館の視察を行いました。館長と学芸員がつきっきりで対応くださり、館自体の修理をされていたので、収蔵庫にも案内いただき多くの南蛮漆器を手にする形で拝見しました。主に、かまぼこ型といわれる小型のトランク形態の櫃（ひつ）と、インド・ポルトガル様式と思しき引き出しのある箆筒型のもの、厨子型のものが収蔵品であり、その質の高さと保存の状態のよさに目を見張りました。いずれ詳しく資料をまとめるつもりですが、文化財として一級品が数多くありました。かまぼこ型は、大きささまざまなりましたが、当スペインでは聖遺物箱としての使用例が数多く確認されていますので、ことさら興味深いものでした。

蒔絵図案について解説させていただいているうちに、南蛮漆器に使用されている図案に系統的な使用の仕方に気がつきました。これについては、図案資料を整理し考察を要する必要を感じました。

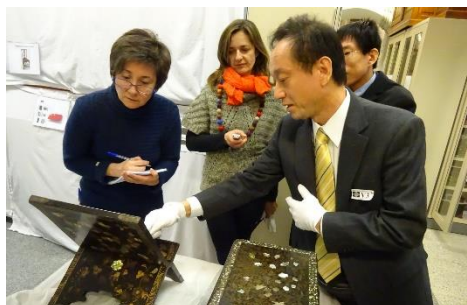
収蔵品の一つに、興味深いものを見つけました。かまぼこ型の小型の櫃でしたが、どう見ても日本製でないものがありました。使用されている塗料も漆ではなく図案も日本のものではありませんでした。推測するに中南米でできた可能性を思いました。現在は、南蛮漆器の輸出の多くが東インド会社の取引によると考えられています。いわゆる西回りのルートもしっかりと確立されていた可能性を思わせるものとして興味深い一点でした。ま

た、時間がおしてしまいました。

正午近くから、日本大使館でラジオ取材と EFE 通信社の取材を受けました。ちなみにスペインの昼食時間は午後 2 時前後でした。

講演会並びにデモンストレーションは、午後 5 時からデザイン・イノベーション大学で行いました。その前に同大学でテレビ取材を 2 件受けました。

講演会並びにデモンストレーションは、建築科の学生と教えておられる先生が中心となって聴講いただきました。質疑応答を終えたあとは、特に先生方が陳列している作品を手にとってご覧になり、コラボレーション出来ないかとの質問をいただきました。ここでも時間が足らず尻切れトンボのような形となってしまいましたが、かなりの興味を引いたようでした。



視察（国立装飾美術館）



講演会およびデモンストレーション
（デザイン・イノベーション大学）

●3月 1日（火）

午前 10 時 30 分、セラルボ美術館の視察を行いました。当初、館長が来られない話でしたが、予定を繰り上げ駆けつけていただきお目にかかることができました。伯爵のお屋敷を美術館にしたというセラルボ美術館でしたが、清廉潔白な伯爵の人柄を表すようなエピソードを数々うかがいました。美術館の性格を表すものだと思います。丁寧な説明をいただき、ものによっては時間をとって他の鑑賞者を締め出す形の対応をとっていただき恐縮しました。展示蒔絵漆器に関しては、近代のものが中心であり、鎧や兜ほか漆器の弁当箱まで収蔵品がありました。馬具の鎧の金属加飾について、興味深い事例を見つけました。さらに、見てほしいものがあると収蔵庫に案内され、調査しながら所蔵の蒔絵漆器を拝見しましたが、時間切れとなり途中で切り上げ、大使公邸へ向かったのです。

大使公邸での文化関係者との意見交換の懇談会と昼食会では、越川和彦大使がお迎えくださり何名もの美術館関係者を招かれて有意義な懇談会を経験させていただきました。中にオビエド大学准教授の川村やよい先生がおられました。スペインにある南蛮漆器を調査研究されている方で、今回是非お会いしたかった一人でした。昼食会では、外交官研修生が 6 名通訳として参加されました。若手の研修生を登用するなど、伝統工芸文化の継承に心を砕く私にとっても将来を背負う若手の研修生にとっても、特筆すべき大使のはからいだと感じました。唯一心残りは、この懇談会と昼食会のみ写真を撮り忘れて一枚も残って

いないことでした。



視察（セラルボ美術館）



講演会およびデモンストレーション
（エル・コルテ・インGRES）

講演会及びデモンストレーションは、スペインで最大手のデパート、エル・コルテ・インGRESで行いました。始まる前にメディア取材を受けましたが、その折に「新聞読むなら〇〇、ラジオ聞くなり〇〇、テレビ見るなら〇〇」とスペイン語で言うようにいわれ、そのあと、日本語でも同じことを繰り返すように言われて、その時点で、まんまとマスコミの宣伝の片棒を担がされたことに気づき、大笑いをしました。参加者は10名あまりと極端に少ないものでしたが、みなさんかぶりつきの形で聴講いただき、目の前で蒔絵デモンストレーションを楽しんでいただけたのではないかと思います。そのあと、熱心な質問攻めにあいました。

<ポルトガル>

●3月 2日（水）

移動日。マドリッドからポルトガル、リスボンへ。
発見のモニュメント、ベレンの塔の見学。

●3月 3日（木）

午前、オリエント博物館を視察。館長と親しくお話をさせていただいたあと、収蔵品を拝見しました。聖龕やインド・ポルトガル様式の家具型漆器、イエズス会の紋章の入った書見台など、南蛮漆器の数こそ少ないものでしたが、一級品の所蔵品ばかりでした。近代の蒔絵漆器もあり、日本製、韓国製の違いについて意見の交換ができました。

午後6時から、大使公邸でリスボン国際観光フェアレセプションが開かれ、オープニングの講演を行いました。東博史大使の歓待を受けました。フロア中央に蒔絵仕様見本の展示をし、別のテーブルで蒔絵の見本作品の展示をしました。講演終了後、日本は近代産業ばかりだと思われがちだが、このような伝統文化を大事にしていることをアピールしてもらってうれしいと、参加の邦人からの握手を受けたのが、印象的でした。

ちなみに、フィレンツェの講演会でも同感想をいただいていた。



視察（オリエント博物館） リスボン国際観光フェアレセプション（大使公邸）

●3月 4日（金）

大使とグルベンキアン財団博物館館長並びに学芸員らと歓談及び会食の後、徒歩でグルベンキアン財団博物館へ。

グルベンキアン財団博物館の視察を行いました。博物館の規模の巨大さに驚きました。さまざまな国の歴史にまつわる逸品の展示に驚きを隠し得ませんでした。蒔絵漆器については、主に江戸期と思われるものの秀作が数多く収蔵されていました。

講演会およびデモンストレーションをグルベンキアン財団博物館の講堂で行いました。大使ならびに館長、学芸員、前日の視察で訪れたオリエント博物館の学芸員、国立古美術博物館の学芸員らが来てくださっていました。特に講演会中に蒔絵の現物を高精細カメラで投影するパフォーマンスを行い、学術的な方法論に歓声が上ったことを覚えています。デモンストレーションの映像投影にも熱がこもりました。質疑応答でも時間を越え、職員が止めるまで熱心な質問が続きました。



講演会およびデモンストレーション（グルベンキアン財団博物館講堂）

●3月 5日（土）

午前中に国立古美術博物館の視察を行いました。館長の出迎えを受けた後、コンセイサン学芸員の丁寧な案内で数多くの収蔵品を見学しました。南蛮屏風、南蛮漆器、南蛮蒔絵調度漆器、インド・ポルトガル様式の家具などについては、特に意見を交わしながらの拝見をしました。秀逸な作品も多く、また時代背景を考えさせる展示でもありました。疑問を抱えていた南蛮漆器のインド・ポルトガル様式をはじめとする形状について、特にポル

トガルの家具の歴史の収蔵品を見せていただきました。お陰で考えをまとめる材料を得ることができ、大きな収穫を得ることができました。その上、コンセイサン学芸員からの共同研究のお誘いをいただき、期待以上の成果を得ることができました。

午後から、本事業の最後の公式行事であるリスボン国際観光フェア会場で蒔絵のデモンストレーションを行いました。蒔絵作品の展示ならびに実演をしながらの説明をしました。途中から通訳に作品説明を加えてもらい、足を止める人が多く、日本が持つ伝統文化の深さに見入っていただいたのでした。京都府と京都市から送っていただいた海外向けのパンフレットも配布していただき、成果を上げることができました。



視察（国立古美術博物館） デモンストレーション（リスボン国際観光フェア）

●3月 6日（日）

ジェロニモス修道院を見学。

リスボン発。

●3月 7日（月）

日本着。深夜日付が変わって無事帰宅。

【まとめ】

本発信事業では、メディア取材が大変多く、日本独自の伝統工芸の蒔絵漆器への関心の高さがうかがえました。また、訪れた美術館・博物館では、すべて館長との面談をさせていただくという栄に浴しました。講演会での質疑応答並びに視察や意見交換では、いずれの館でも大幅な時間延長を強いられることになり、うれしい悲鳴を上げることになりました。

私の場合、現役の伝統工芸士として初の博士号を取得したことと、大学に招聘され教授職を担っていることもあり、文化に対する考え方や所蔵作品の具体的な内容に踏み込む話題が多く、話は尽きず時間切れで打ち切ることが多分にありました。所蔵されているものは、いわゆる文化財に当たるものでした。作品の時代的な特徴の理解及び、その技法や材料、制作工程の説明が可能なので、文化財の保存修理の専門職の方からのアプローチも多くありました。

おこがましくも私一人の成果であるように書いていますが、これはひとえに私をご担当

くださった本省の担当者と、各国日本大使館の職員の方々のネゴシエーションのすごさにほかなりません。また、講演骨子になかった私の関西弁の冗句を見事に同時通訳してくださった方々の能力のすごさに脱帽でした。改めて、心より感謝申し上げます。

本事業が、イタリアでは日本との国交 150 周年記念イベントとして、パンフレットの最初に掲載されていました。さまざまご配慮にも感謝いたします。

本事業で、おしなべて驚いたことは、日本の伝統文化に対する造詣の深さでした。当初、400 年余り前という曖昧な表現をしていましたが、すぐさま指摘を受け 470 年余り前と訂正をする羽目になりました。日本のオリジナル文化である蒔絵漆器が 470 年前にヨーロッパの王侯貴族を魅了し、東西交流を果たした功績の大きさを実感しました。そして今回、本事業で漆文化を再発信できたことは、大変誇らしいものでありました。また訪れたそれぞれの国で受け入れていただけたことには、それ相応の成果が上げられたのではと自負もしています。

さらに蒔絵漆器での文化交流もさることながら、各国で感銘を受けたことが数々あり、これらも大きな成果でありました。

初めて降り立ったフィレンツェで深夜のホテルの部屋に入ったときに、講演会の共催者であるサンタマリア・ノベッラ薬局社長のアルファンデリー氏から、日本語での「ようこそ」のメッセージとプレゼントを置いていただいていたことへの驚きとうれしさ。ローマで講演をさせていただいたジュセッペ・トゥッチ東洋美術館ポリケッティ館長が、講演会終了後のひと気がなくなった由緒ある講堂で感謝を込めてとおっしゃって、カンツォーネさながらラララで「上げばとおとし」を独唱してくださったのには、鳥肌が立つほど感動しました。

加えてイタリアでは、フィレンツェの夜の空港で最初に一人でお出迎え下さったのは、当地の講演会を支えてくださった一人、前田知美さんでした。フィレンツェにお住まいで、我が京都産業大学外国語学部ご出身の方でした。

スペインのパンプローナでは、空港からのタクシーの運転手の方が、フランシスコ・ザビエルの出身地だと教えてくれ、その出自についても詳しく説明してくれました。1549 年、日本にキリスト教を伝えたと言われる宣教師であることは周知のことですが、蒔絵によるキリスト教用具の制作の原点だと考えることができます。

マドリッドのデザイン・イノベーション大学の講演会の質疑応答では、学生を指導されている先生から日本文学への言及があり、同大学では建築科の全員に、谷崎潤一郎の「陰影礼賛」を教えていると言われ仰天しました。私も漆の文化を紹介するとき使用する秀逸な随筆集ですが、光の取り入れ方を学ぶのに適しているとおっしゃられていました。

ポルトガルのリスボンでは、当時の南蛮人屏風の複製がポルトガル人経営の寿司店壁面を飾っていて、異国の地で日本との交流の歴史がこんなに大切にされていることに胸が熱くなりました。発見のモニュメント前の広場の石畳に刻まれている世界地図には日本にたどり着いたのが 1541 年になっていました。（日本では 1543 年（天文 12 年 8 月 25 日）種子

島・西浦の小浦に一艘の大型ジャンク船がやって来たことを伝えています。) また、今の日本で使用している 250 もの単語が、ポルトガル語に由来しているそうです。

私は、いまさらながら歴史の深みと自分の無知を知りました。と同時に、日本人があまり自国の文化を顧みていないことに、改めて気づかされました。470 年前にヨーロッパとの交易が始まり、蒔絵漆器がヨーロッパに受け入れられていたことを知っている人は、そんなに多くはないはずです。そしてピアノブラックが、漆をモデルに開発されたことをご存知でしょうか。

今回訪れた地は、大航海時代に世界に乗り出した先駆者たちの地でした。それぞれヨーロッパからは、片やアフリカ大陸の喜望峰を回りインド、東南アジアを経て、遙か極東の地の果ての日本を訪れ、一方で大西洋・中南米・南太平洋航路で日本までやって来たのでした。世界は一つの球体であるということが認識され、世界の大きさも把握されたのでした。これを初めての東西交流の歴史とすると、日本はその歴史的な大きな意味のある位置にあったのでした。そのことを改めて知るようになりました。

さらに極東の日本からは、日本画がゴッホに影響を与えたことや、浮世絵の包み紙などがアールヌーボーの芸術潮流に大きな影響を与えたことはよく知られるところです。本事業を終えて、日本ブランドの意味をようやく理解した始末です。

これは私にとって、日本ブランド発信事業の緒についていたことにほかなりません。いかに今後につないでいくかが重要です。素晴らしい文化をもっていたとしても活用できなければやがてはなくなってしまいます。今回の日本ブランド発信事業で得たさまざまなものを成果としてつないでいくために何をなすべきか、ずっと考えています。

現代社会においては、後継者がいないといわれる伝統産業は、つまるところ後継者がいないのではなく、需要がなく産業として成り立たないのが大きな原因です。その認識が一般的な認識と大きく食い違っているところがあります。存続が厳しくても志してくれる若者は、美術大学や専門学校を見る限り大勢いると言っても過言ではありません。学び修行してくれる弟子達や、伝統産業に従事する若い後継者のためにも、自立していける方法論の確立は是非でも成し遂げられなければならない責務だと思っています。本事業名「蒔絵文化と未来への継承」にも掲げた重要な目的の一つです。



制作風景 (下出蒔絵司所)



蒔絵パネル (京都産業大学サギタリウス館)

模索する中で考えられる一つの方向性として、訪れた各地は南蛮漆器と称する歴史的な蒔絵漆器を所蔵するところでしたので、日本では現在も 470 年前にヨーロッパの人々を驚かせた蒔絵の技術、天然素材を用いた手仕事と自然観に根ざした美意識が大切に継承されていることをもって、事業展開ができないかと考えています。文化を基軸とした手仕事の産業のあり方、たとえば文化財の保存修理や現代性のある蒔絵の制作です。

長くなりましたが、可能ならば本年中に、再び各国の職員の方々をわずらわせに行けな
いかを検討していることを記し、後先になりましたが快く受け入れてくださいました海外
関係者の皆様ならびに、改めて、各国大使の温かいご配慮と、本省をはじめ各国のお世話
くださいました関係者の方々の縁の下の多大なお力添えに感謝を申し上げ、本事業の報告
と致します。ありがとうございました。

(了)

【参考リンク】

[外務省「日本ブランド発信事業」ウェブサイト](#)

[下出蒔絵司所 下出祐太郎 ウェブサイト \[shimodeyutaro.com\]\(http://shimodeyutaro.com\)](#)